



K A P P A N O V E L S

長編スペクタクル小説 書下ろし

戦艦“大和”米艦隊を^{せんめつ}殲滅す！

アメリカ本土決戦

ひ やま よし あき
檜山良昭



お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。また、今後、どんな本をお読みになりたいでしょうか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
(郵便番号112)

光文社 出版局

長編スペクタクル小説 アメリ力本土決戦

昭和57年8月10日
昭和59年3月15日

初版1刷発行
10刷発行

定価680円

著者 ひ 檜 山 良 昭

神奈川県藤沢市村岡東 3-23-6

発行者 大 坪 昌 夫

印刷者 盛 照 雄

東京都文京区水道 2-4-26

慶昌堂印刷

発行所

東京都文京区音羽2
振替 東京 6-115347

株式会社
電話

光 文 社
東京 (942) 2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 (複本製本)
表紙の模様・意匠登録116613 © Yosiaki Hiyama 1982

ISBN 4-334-02478-5

Printed in Japan

長編ベストセラー小説・書下ろし

戦艦“大和”米艦隊を殲滅す！

アメリカ本土決戦

ひやま よしあき
檜山良昭



カッパ・ノベルス

アメリカ本土決戦

目次



第一部 ワレ、奇襲ニ成功セリ

第一章 交渉決裂……………

9

第二章 開戦前夜……………

33

第三章 ニイタカヤマノボ新高山登レ一二〇八……………

45

第四章 ハワイ沖の死闘……………

62

第五章 は「波号演習」……………

81

第二部 ハワイ布哇諸島ヲ攻略セヨ

第一章 ハワイ方面軍……………

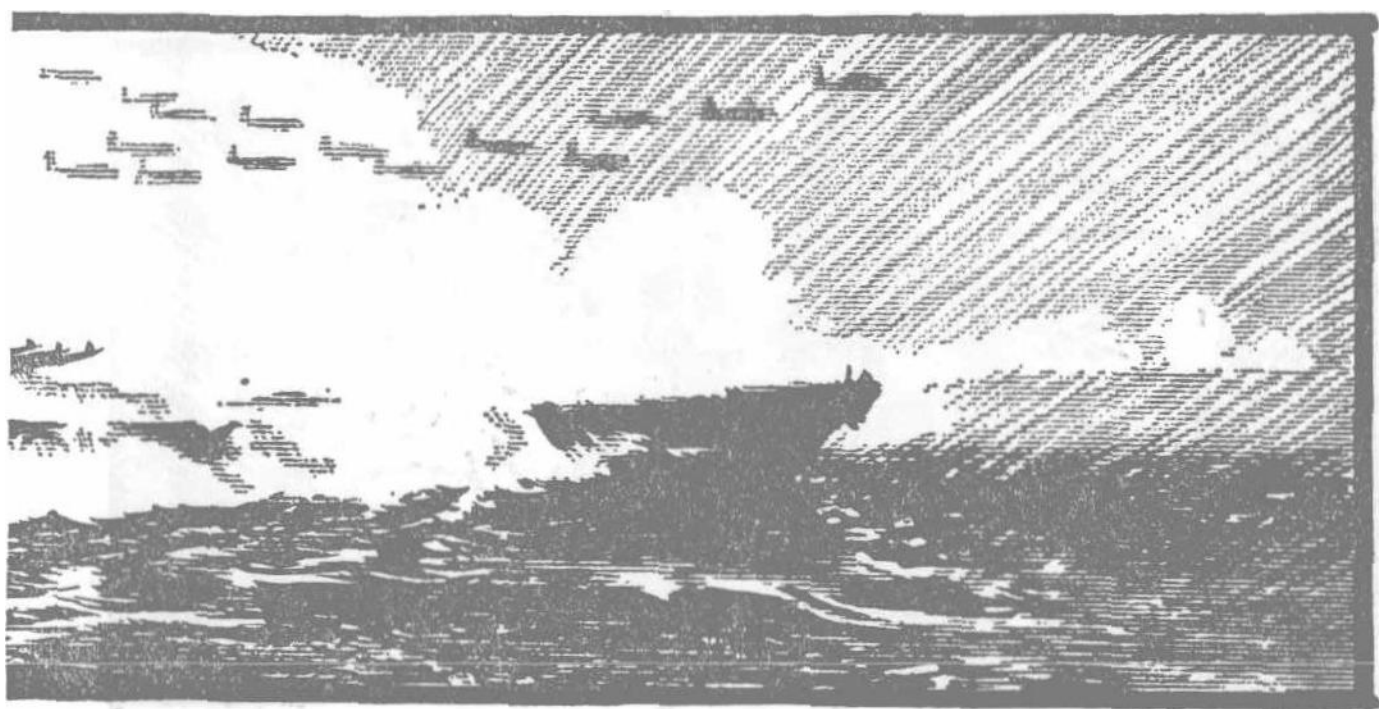
91

第二章 第二次ハワイ沖海戦……………

102

第三章 巨大戦艦^{やまと}“大和”……………

124



第四章 横山大尉、脱走す……………

141

第五章 オアフ島、敵前上陸……………

151

第六章 後方攪乱^{かくらん}……………

179

第三部 ワレ、米本土ニ上陸セリ

第一章 講和工作……………

195

第二章 太平洋艦隊の最期^{さいご}……………

212

第三章 渦まく陰謀……………

233

第四章 血戦！米本土……………

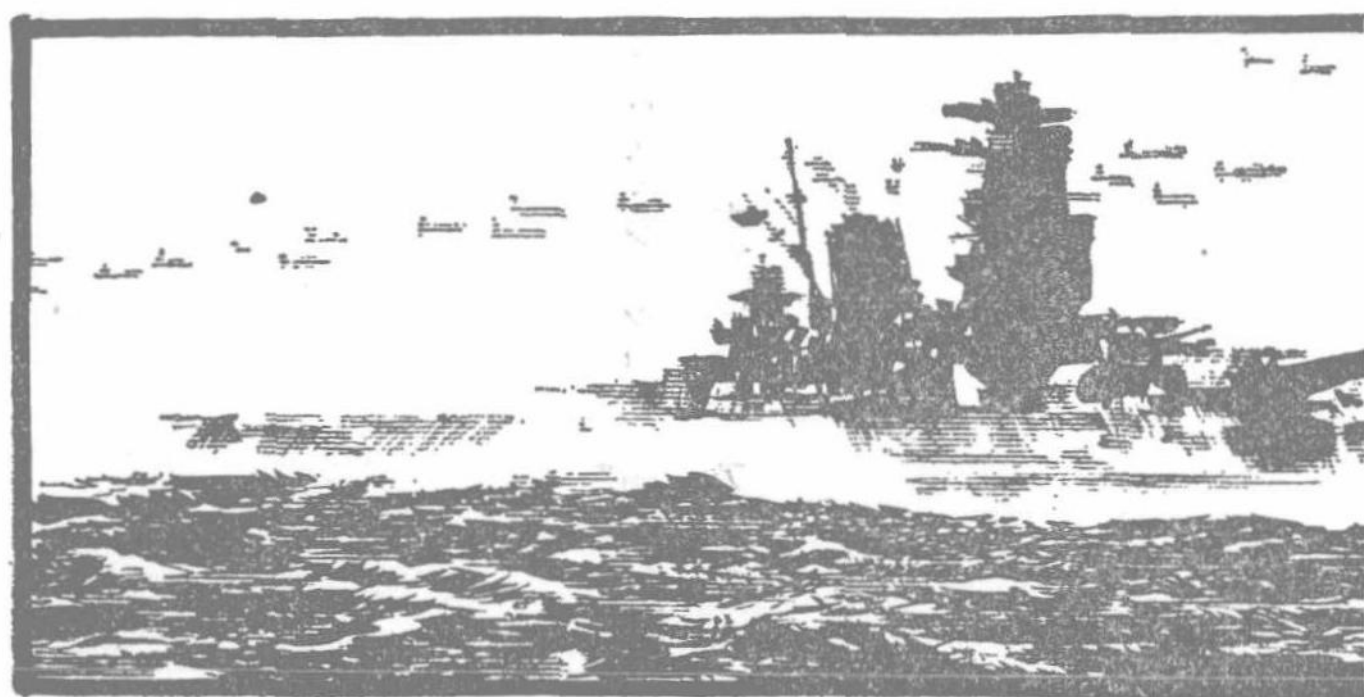
245

第五章 暗い海原……………

267

解説 吉田俊雄……………

288



本文のイラストレーション

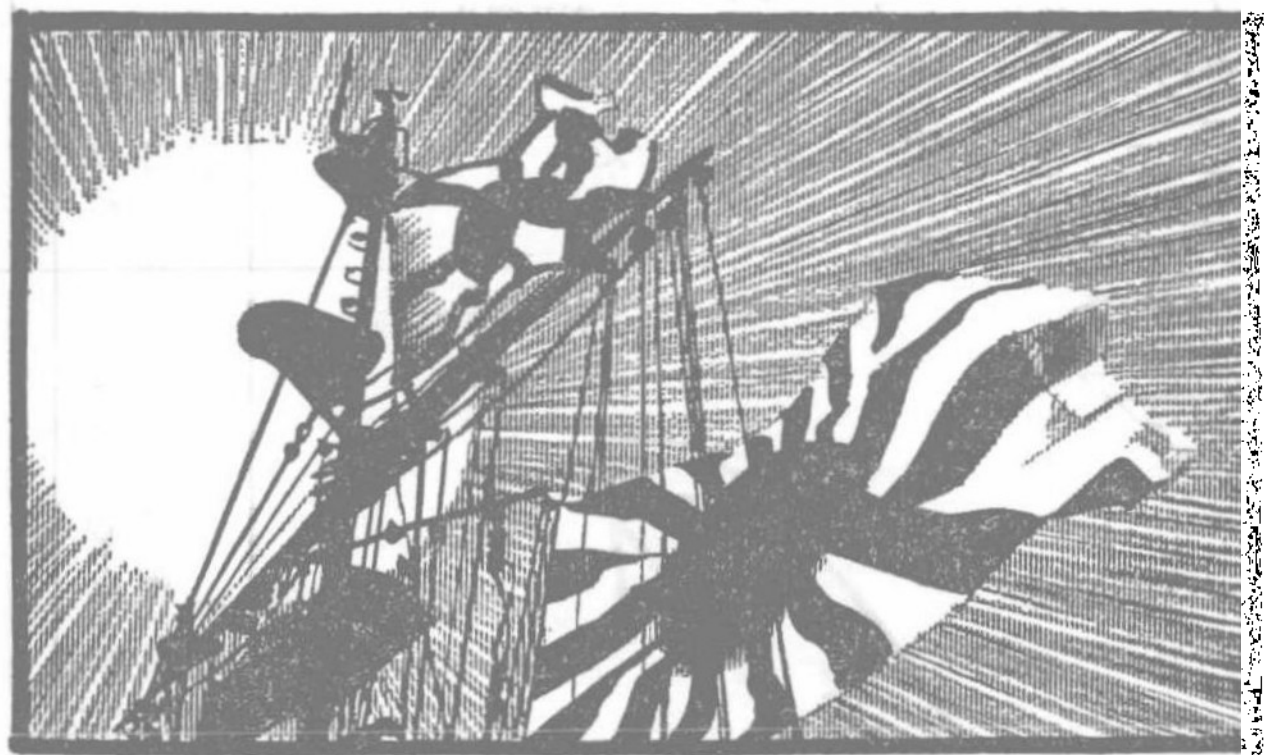
柳沢 達朗やなぎさわ たつろう

本文の地図

アトリ エ不忘あとり えふぼ

第一部

ワレ、
奇襲ニ成功セリ



昭和16年12月8日 真珠湾要図



第一章 交渉決裂

1 ワシントンDC S 16・11・26

大統領が執務室での執務を終え、従僕のアーサー・プレスティンが押す車椅子に乗って私室のある西翼のほうに退こうとしたときに電話が鳴った。

「待て、電話だ」

ルーズベルト大統領はプレスティンを押しとどめ、手をのばして電話をとった。

「ハル國務長官からの電話をおつなぎします」

夜勤のホワイトハウスの電話交換手が言った。

「ハルか、私だが……」

電話はグリーン・ブライヤー・ホテルに私宅を持つ國務長官のコーデル・ハルからだった。

「大統領、たったいま野村大使と来栖特使にわれわれの

回答を手渡ししました。おそらく日本政府はそれをはねつけてくるでしょう」

ハルは落ち着いた事務的な口調で言った。日本政府ははねつけてくるだろう。それは計算ずみのことだった。

「そうかね。それでいいのさ。遅かれ早かれ日本とわれわれとの交渉は決裂したろう。それで、國務長官、これで日本は戦争という手段に訴えてくると思うかね」

ハルはちよつとまを置いてから、

「その可能性はあると思いますね。石油輸入をストップされた日本は一カ月に四十万トンの石油を消費しています。彼らは備蓄をとり崩して辛うじて持ちこたえています。それも時間の問題です。経済的破局を避けようとするなら、石油の湧き出るオランダ領東インドを占領するしかありません」

「それでは太平洋にある陸海軍に戦争警戒命令を出しておこう」

「ですが、大統領」

とハルは言葉を挟んだ。

「われわれのほうから日本を挑発したり、先制攻撃をかけたりしてはなりません。われわれは戦争を回避するために全力を尽くした、しかし日本に攻撃された。そうい

う印象を作り出さなくては世論は宣戦布告を認めないでしようからね」

「わかってるとも」

大統領は國務長官を安心させるように言った。

「しかし、日本軍がわが国の領土を直接に攻撃してこない、厄介だな。宣戦布告の名目がなくなる」

「いいえ、大統領。日本がオランダ領東インドの石油を本国に輸送しようとすれば、フィリッピンは眼の上のコブです。日本軍はフィリッピンの脅威を除こうと攻撃を加えてくるでしょう」

「そんなことを彼らがすれば自滅するだろう。とにかくわれわれは日本に戦争をするのか、われわれの要求に従うのか、選択権を与えたのだ。われわれとしてはどちらを彼らを選んでもかまわないと思うよ」

そして大統領は、

「お休み、ハル。ご苦労だった」

とねぎらいの言葉をかけ、電話を切った。

従僕のプレスティンは車椅子を押そうとした。するとルーズベルトは想い出したように制止した。

「待て、そうだ。陸軍長官と海軍長官に戦争警戒体制をとるように指示しておかなくてはいいかん」

「ヨーロッパの戦争にアメリカは介入しない」

しばしばそう断言してきたルーズベルト大統領が、その考えを改めるようになったのはフランスが降伏し、イギリスが降伏の危機にさらされるようになったとき、一九四〇年（昭和十五年）夏であった。

「イギリスが降伏すれば、次はアメリカがドイツの脅威にさらされる」

そうした戦略的な判断からルーズベルトはイギリスに対する軍事援助に踏みきった。そして一年後の一九四一年夏には、ドイツに対して宣戦布告こそしなかったが、事実上参戦に踏みきったのである。

それと併行してルーズベルトは太平洋の軍事的な防衛にも急ピッチで力を入れるようになった。ドイツと軍事同盟を結んでいる日本が、イギリス、フランス、オランダなどのアジアにおける植民地に対して軍事行動を起こす恐れがあったからである。

このためルーズベルトは、アメリカがドイツとたたかっているあいだ、中国、イギリス、オランダ領東インドとともに日本に対して経済封鎖を行ない、また軍事防衛協力を行なうことで、日本を封じこめておこうと考えた。

「ドイツとたたかっている間、その同盟国日本を封じこめておく。アメリカの軍備が大西洋と太平洋の二正面戦争でも充分に耐えられるようになる一九四二年秋までは、ともかく日本とことを構えたくない」

一九四一年夏のルーズベルトの外交戦略はそうであった。

しかし、一九四一年秋になると、彼は日本が軍事行動を起こすならそれでもよいと考えるようになった。フィリッピンの防衛体制はマッカーサー將軍によって予想以上に整備され、長期間持ちこたえられるであろう。

軍事戦略もすでにできあがっていた。

アメリカは五月二十八日に「A B C — 1」と呼ばれる英米作戦協定を締結し、さらに六月初めには「A B C — 1」に基づく「レインボー第5号」と呼ばれる陸海軍統合作戦計画を承認した。

それは主戦場を対ドイツ戦に求め、南西太平洋ではイギリス、オランダと協力して防衛戦にあたるのを戦略方針としている。

そして、日本に対して宣戦布告するときを次の二つの場合に求めている。

(一)アメリカの領土あるいは委任統治領に対して日本軍

が直接的な武力行使を行なったとき。

(二)日本軍が東経百度以西、北緯十度以南のタイ国領土、ポルトガル領チモール島、ニューカレドニア島、ロイヤルティ群島のどこかに侵入したとき。

アメリカは主戦場を大西洋に求めているので、太平洋方面への増援を断念し、これまでの兵力でもって領土を防衛する。いっぽう海軍はマーシャル、カロリン群島を占領し、トラック島に前進艦隊根拠地を築く。

とりわけ「レインボー第5号」はルソン島をアメリカ軍の防衛の要とみており、現有兵力であっても日本軍がこれを撃破するのは容易ではなく、日本軍のルソン島攻撃がそれに手間どればシンガポールとインドネシアへの攻撃が遅れ、連合軍に有利となるとみていた。

七月二十六日には大統領はマッカーサー將軍を現役に復帰させ、マニラに司令部を置くアメリカ極東軍司令官に任命した。しかし、マッカーサーは、できる限り現有勢力でフィリッピンを防衛し、日本軍の攻撃を遅らせるという「レインボー第5号」の案に反対で、スチムソン陸軍長官を説得し、積極的防衛に転換させようとした。

その結果、八月なかばから高射砲、戦車、航空機がフィリッピンに送られ、また地上兵力も増派されることに

なった。

このため、十月末には、大統領も國務長官もフィリッピンの防衛態勢が確立する十二月以降に日本軍が攻撃してきても、フィリッピンを防衛できるという確信を持つようになっていたのである。

そして、これは日本の南方進出を抑制し、アメリカは対ドイツ戦に集中できるといふ見通しを与えたのである。アメリカの軍事力は来年、一九四二年の夏までには二正面戦争にも耐えられるほどになる。そのときまで日本を封じこめながら、交渉の場であやしておく。というのが二人の対日戦略だった。

十一月なかばには、二人とも日本政府が理性的なら戦争に訴えるようなことはしないだろうし、戦争に訴えても日本は自滅するだろうという判断に立っていた。

そして、あえてアメリカのほうから外交的な譲歩をしてまでも戦争を回避する理由はないと考えるまでになっていたのだった。

2 東京 S 16・11・27

この日の午後二時すぎ、ワシントンの駐在陸軍武官で

ある磯田三郎少将から陸軍大臣宛に一通の電報が届けられた。

「米、文書をもって回答す。まったく絶望なり」

日本軍がフランス領インドシナに進駐したこの年の七月末、日米関係は決定的な局面をむかえた。

アメリカは昭和十四年七月末に日米通商航海条約の破棄を通告してきて以来、日本に対してさまざまな経済制裁を加えてきた。そして日本軍がフランス領インドシナに進駐した昭和十六年夏に、在米日本資産の凍結、石油の全面輸出禁止という手段に訴えてきたのである。

また、イギリス、オランダ領東インド、インド、ビルマ、ニュージーランド、フィリッピンもアメリカにならって日本との経済断交を通告してきた。

このため日本は石油や経済資源の輸入を絶たれ、日中戦争の遂行はおろか、経済危機の恐れさえ出てきたのである。

この状況——A B C D 経済包囲陣を打開するために、日本政府は野村吉三郎大使、来栖三郎特使にアメリカ政府と外交交渉を行なわせていた。しかし、日本の足元を見透かすように、アメリカ政府は外交的譲歩や早期妥結の気配を見せず、交渉を長びかせていた。

日米両陸軍戦力比

アメリカ陸軍(昭和16年8月)		日本軍(昭和16年12月)	
歩兵師団	29個	歩兵師団	50個
州兵軍	18個		
装甲師団	4個	軽車両化歩兵師団	3個
騎兵師団	2個	(うち戦車5個聯隊)	
陸上兵力合計	53個師団	陸上兵力合計	53個師団
陸軍航空部隊	200個中隊 (7,800機)	航空部隊	148個中隊 (3,000機)
総合計	160万人	総合計	210万人

交渉期限を十一月末までと限った日本政府は十一月七日に譲歩を含んだ日本案を、これが拒絶されると十一月二十日に暫定和解案をアメリカの國務長官ハルに送った。磯田少将からの至急電は、この暫定和解案に対するアメリカ側の回答を伝えてきたものであった。

その後まもなく、外務省からアメリカ側の回答文書をタイプ印刷したものが陸軍省に届けられた。日本側が「ハル・ノート」と呼ぶことになった文書である。

そのなかでアメリカ政府はこれまでの主張をいっさい変更しないばかりか、中国からの全面撤兵、蔣介石政府の承認、三国同盟の空文化というまったく新しい条件をつけ加えてきた。

午後六時四十分、「ハル・ノート」を討議するために、陸軍省と参謀本部の上級幹部の会議、陸軍幕僚会議が開かれた。

「これはわが国に対する最後通牒^{つうてい}同然ではないか」

「あくまで平和解決をのぞむといっておきながら、アメリカには譲歩の精神が欠けているんだ」

「これまでの交渉は軍備拡張計画が実現するまでの時間稼ぎにすぎなかったのか」

「わが国を戦争に追いこむようなものだ」

文書に眼を通した幕僚たちからは次々にアメリカに対する激しい不満の声が出た。

「アメリカの要求がこういう厳しい条件では、これ以上交渉を続けることは戦機の点からみてわが国に不利となる。十一月九日の『帝国国策遂行要領』に基づき、開戦の決意をしてよろしいか」

一カ月半前に首相兼陸相に就任した東條英機が、沈痛な表情で出席者たちを見廻して尋ねた。

十一月一日に採択された「帝国国策遂行要領」は、対米交渉を続けて平和解決に努力しながら、開戦の時期を十二月初めと定め、その作戦準備をすすめる。十二月一日午前零時までに対米交渉が成功すれば、武力発動は中止するということを国の方針として定めていた。

東條の言葉に幕僚たちは全員がうなずいてみせた。それを確認した東條は、重々しい口調で結論を下した。

「では、ただちに大本営連絡会議を開き、『帝国国策遂行要領』の再確認と、宣戦詔書案の作成にとりかかるとする」

霞が関の外務省大臣室で、東郷茂徳は何度もため息を

ついて「ハル・ノート」を読み返していた。過去十カ月にもわたる日米交渉の結果をまったく無視して、突然アメリカがこのような厳しい条件をつきつけてきた背景はなんなのか。これでは日本の軍部が受け容れないのは眼に見えている。

しかしもう交渉のやりなおしはきかない。十一月二十七日、つまりきょうが交渉のタイムリミットであり、このあとは自動的に戦争に突入していかざるをえないのである。

「困ったなあ、大和田君」

外相はアメリカ局長の大和田兼敏にむかってつぶやいた。

「いまになってこんな要求を出されては最後通牒のようなものだ。いよいよ戦争だよ」

「しかし、閣下、いったい軍は勝利の目算があって戦争をするのですか」

「南方の資源地帯を確保すれば、充分にアメリカと長期間たたかい続けられる。その間に海軍がアメリカの反撃を撃退し、陸軍はソ連を攻撃する。ドイツと日本に攻撃されてソ連は降伏するだろう。また中国、イギリスも各個撃破する。そうになったらアメリカはたたかうことがい

やになって日本に降伏するだろうというのだ」

それを聞いて大和田は苦笑いを浮かべた。はたして軍部が考えているようにつごうよく筋書が運ぶものだろうか。日本の国力では、アメリカを軍事的に屈伏させる方法はない。このため、ドイツがソ連やイギリスを屈伏させるという他力本願をあてにしているのである。

「そんな無茶な。南方の資源地帯を確保したとしても、資源を日本本国に送らなくてはなりません。アメリカは潜水艦などで通商破壊戦を狙ってくるでしょう。あの広大な海域を海軍は守りきりながら、片いっぽうでアメリカの反撃を撃退するという。そんなことができるんでしょうかね」

大和田はかたわらに同席している部下の梶原かじわらの同意を求めると外相は首をふって、

「海軍軍令部はできるといつているから困る。陸軍や国民に対するてまえ、できないとは言えずにやせ我慢をしてるんだ」

「聯合艦隊司令長官の山本五十六いそむく大將はどう考えているんですか」

「長官もいまのような大本營の戦略では勝てないと思っ

ているのは確かだ。南方の資源地帯を確保して、アメリカの反撃を叩き続ける。そういう受け身の長期戦ではだめだ。先手先手とアメリカに攻撃を加え、他方で講和の働きかけをしていく。一、二年の間に結着をつけるべきだという考えのようだな」

「閣下も同じお考えですか」

東郷はここ数カ月の心労でやつれきった顔をうなずかせた。

重臣、政界のなかでは日本の針路について三つの方法が議論されている。

(一) アメリカの要求に屈伏して経済封鎖を解いてもらい、
臥薪嘗胆がしんしょうたんを期する。

(二) 現状維持のまま、事態解決を先に延ばす。

(三) 戦争という手段に訴えて、アメリカに猛省を促す。

この三つのうちのどれもが日本にとって好ましい結果ではない。もとはといえば満州事変以来の軍部主導の政策が日本をこのような袋小路に追いこんでしまったのである。明治以来ひたすら強国の仲間入りをしようとして突っ走ってきた日本。皮肉にもそれがいまや自滅の淵に立っているのである。

アメリカに屈伏して外交の自由を失うか。現状維持の